

第4章 テストⅡ－自己効力感の形成とその関連要因の検討

1. 目的

進路や職業を選択するときには、職業についての理解とともに、職業を選択する主体である個人の個性や特徴について十分に理解することが重要である。個性を理解する方法には様々あるが、前章では、「職業レディネス・テスト」というテスト（心理検査）の結果にもとづく生徒の個性理解について述べた。その結果、一つのテストから得られた結果であっても、いろいろな観点から分析することによって生徒の興味や個性を理解し、職業意識の発達のレベルを把握できることが示された。前章では、職業興味にもとづく個性理解が中心となったため、本章では、もう少し視点を広げ、生徒の進路意識の発達や形成、および意識の発達に影響すると考えられるいくつかの要因との関連を検討してみたい。

進路や職業についての生徒の意識を測定するための尺度にはいろいろなものがあるが、第一章で述べた通り、本報告書では、学校段階の生徒の職業意識の発達を捉えるための一つの指標として「進路に対する自己効力感（career self efficacy）」に焦点をあてている。そこで、進路に対する自己効力感を測定する尺度として「進路課題自信尺度」(坂柳・清水,1990)を取り上げ、進路課題自信尺度によって測定された自己効力感のレベルを明らかにするとともに、自己効力感の形成に影響すると考えられる変数との関連を検討する。

進路に対する自己効力感（あるいは自己効力）は、近年、進路選択行動に影響する一つの要因として活発に研究が進んでいる概念である(Betz & Hackett,1986)。自己効力の考え方は、もともとは社会的学習理論を築いた Bandura(1977)によって提唱された概念であり、何らかの結果を導くために適切な行動を自分が効果的に行えるという確信あるいは自信を、本人が認知している状態を示す。さらに、自己効力の理論では、ある課題に対する自己効力は、その課題に対する適切な取り組みを予測することができると思う。つまり、進路課題に直面した時に、その課題を適切に処理できると自信をもっている場合は、実際の場面においても適切に処理できるということを想定するのである。

このような考え方に従えば、自己効力感の高さは進路意識の発達のレベルとも密接に関連することが考えられ、学年間で自己効力感を比較したり、同一学年を対象として2時点で測定した進路成熟度との関連をみた研究が行われている（坂柳・清水,1990；浦上,1993）。

他方、従来の研究では、自己効力感における男女差も検討されている。Betz & Hackett(1981)は、大学生において女子学生と男子学生では職業に対する自己効力感に違いがあることを示している。また、Hackett & Betz(1981)は、社会的な性役割の学習等の影響が女性のキャリア発達や自己効力の形成に及ぼす影響をまとめている。前述の坂柳・清水(1990)では、中学生を対象とした進路自己効力を性差や性役割観との関連から検討している。そして、自己効力の得点は男子が女子よりも高く、性役割観尺度との関連で見ると、性役割のステレオタイプに縛られない両性具有型が他のタイプに優越して自己効力の得点が高いことを見いだしている。以上

のことを踏まえると、自己効力の分析に関しては、独立変数として学年差だけでなく性差についても考慮に入れて分析を行う必要があるといえよう。

なお、この他、本研究では、進路意識の発達を捉えるための手がかりとして、「進路課題自信尺度」と将来の「進路への決定度」や「仕事の考慮度」についての回答、学校で学習する教科への自信度、職業レディネス・テストで測定される職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度との関連についても調べる。

青年期における有能感の形成に関連する研究では、中学生段階以降の有能感を考えるとき、学業を中心とした校内生活意識と課外活動の意識の影響を考えることが重要であると指摘されている（松井・村田,1997）。進路に対する自己効力を自分自身の能力への自信の強さの表れでもあると考えるならば、自己効力のレベルを学校での学習活動への自信や学校生活面での態度、志向性と関連づけられる可能性も考えられる。そこで、教科への自信度や職業レディネス・テストで測定される諸変数との関連についても検討することとした。

なお、本章で扱われた変数は、前章と同じく、東京都内の高等学校で実施されたキャリア教育プログラムの授業の中で実施された調査票への回答にもとづいている。本研究では、高校1年生、2年生男女の自己効力感のレベルや、自己効力の形成に影響すると思われる様々な変数（学校で習っている教科への自信、職業への興味や自信の程度等）との関連を検討し、進路課題への自己効力にはどんな要因が関連あるいは影響しているのかということを考えてみたい。

2. 測定の方法

（1）実施についての手続き

本章で扱うデータは、東京都立 F 高等学校(普通科)のキャリア教育プログラムの一環として収集された。F 高等学校は、平成 19 年度にキャリア教育推進校に指定され、キャリア教育に関するモデルカリキュラムを実施している。そのカリキュラムの日程の一部で、「進路意識等に関するアンケート調査」および中学生、高校生向けの職業発達を調べるための検査である「職業レディネス・テスト（以下：VRT）」を担任の教員に実施してもらった。

カリキュラムは、「導入（ガイダンス）」、「展開 1（6名の講師による私のキャリア）」、「展開 2（VRT の説明・実施・採点）」、「展開 3（VRT の結果のワークシートでの整理）」、「展開 4（VRT の結果の見方についての解説）」、「まとめ」という流れで組まれていた。「進路課題自信尺度」は、「展開 2」で VRT を実施する前に行った、「進路意識等に関するアンケート」の中に含めて実施した。

（2）対象者

東京都立 F 高等学校 1年生 174名（男子 81名、女子 93名）；2年生 140名（男子 66名、女子 73名、無記入 1名）；計 314名。

（3）「進路意識等に関するアンケート」および VRT の内容

①「進路意識等に関するアンケート」に含まれる項目

「進路意識等に関するアンケート」として A4 サイズ 1 枚の用紙に、以下のような設問を用意した。

問 1：将来してみたい仕事、なってみたい職業 2 つと、その理由を記述（自由記述）。

問 2：学校で学習している 10 教科についての自信の判定（「得意、普通、不得意」の 3 段階で評価）。

問 3：進路課題自信尺度（12 項目）（坂柳・清水,1990）

問 4：将来の進路に関する項目（「希望する進路が決まっている」、「だいたい決まっている」、「まだあまり決まっていない」、「全く決まっていない」まで 4 段階で評価）

問 5：将来の仕事に関する項目（「よく考えている」、「だいたい考えている」、「あまり考えていない」、「全く考えていない」）まで 4 段階で評価）

②進路課題自信尺度の内容

進路課題自信尺度の具体的な項目は第 1 章にも掲載されているがここでも内容を紹介する（図表 4-1）。「以下の質問項目について、どれくらい自信がありますか」という問いを行い、「自信がある」（5 点）～「自信がない」（1 点）まで 5 段階で評価させる。

図表 4-1 進路課題自信尺度の内容(坂柳・清水,1990)

	項目内容
教育的進路課題	1. 進学先を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること
	2. 進学のための目標や計画をはっきりと立てること
	3. 自分に合う進学先を決めること
	4. 進学した後、充実した学校生活を送ること
職業的進路課題	5. 希望する職業を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること
	6. 希望する職業を実現するための目標や計画をはっきりと立てること
	7. 自分に合う職業を決めること
	8. 就職した後、充実した職業生活を送ること
人生的進路課題	9. 人生や生き方を知るために必要な情報・資料を自分で集めること
	10. 人生での目標や計画をはっきりと立てること
	11. 自分の人生や生き方を決めること
	12. 充実した幸福な人生を送ること

③「職業レディネス・テスト（VRT） 第 3 版」

VRT は、中学生、高校生の職業発達について調べるために開発された尺度である（労働政策研究・研修機構,2006）。A 検査（54 項目で職業興味を測定）、B 検査（64 項目で基礎的志向性を測定）、C 検査（54 項目で職務遂行の自信度を測定）で構成されている。A 検査と C 検査は具体的な職務内容に対して回答を行うことから職業志向性を測定する尺度、他方、B 検査は、日常生活における行動や意識に関する評価を行わせるため、基礎的志向性を測定する尺度として位置づけられている（下位尺度の内容など詳細は第 3 章参照）。

3. 結果と考察

(1) 進路課題自信尺度の学年別、男女別平均値と標準偏差

初めに、進路課題自信尺度についてのデータ全体の傾向を知るため、3つの下位尺度に関して、学年別、男女別に4項目合計点の平均値(mean)と標準偏差(SD)を求めた。結果を図表4-2～図表4-4に示す。これらについてわかりやすくするため、平均値をグラフにしたものが図表4-5である。

まずは学年間で平均値の違いをみってみる。各下位尺度の平均値を見ると、教育的進路課題、職業的進路課題、人生的進路課題のいずれに関しても、1年生の方が2年生より自信度が高い。男女差もあわせて検討してみると、1年生では3つの進路課題に関して男女差がほとんどないが、2年生では、教育的進路課題と職業的進路課題で女子の方が男子よりも値が高くなっている。そこで、進路課題毎に、学年と性による2要因の分散分析を行った。その結果、職業的進路課題と人生的進路課題において、5%水準での有意差は得られなかったが、学年間での比較で、1年生は2年生よりも平均値が高い傾向がみられた(職業的進路課題： $F=3.65, p<.10$ ；人生的進路課題： $F=3.00, p<.10$)。それ以外に関しては、学年、性、交互作用のいずれでも有意差は見られなかった。

進路課題自信尺度の結果で、職業的進路課題と人生的進路課題において、男女ともに2年生の得点が1年生より低めになった結果であるが、加齢とともに職業意識の発達が進むと仮定すれば、1年生より2年生で自信が高まることが予想される。しかし、本研究のデータではこれとは逆の結果となった。

この理由については、次の2つを考えた。第1点は、高校2年生という学年の特徴である。中学校でも高等学校でも新しい学校生活に入って1年目の1年生に比べて2年生は学校生活にも慣れ、受験や進学に向けた選択を具体的に行わなくてはならない3年生になるにはまだ1年あり、中だるみが生じやすい時期であるといわれている。その一方で、1年生よりは受験や進路の決定について意識し始め、不安をもつ者も多くなる時期でもあろう。そういったことから、1年生よりは2年生において将来の進路に対する様々な葛藤を持つ者が多くなり、全体として自信度も低くなるのではないかと思われる。第2点は個人差の影響である。職業レディネス・テストの標準化調査におけるデータをみると、職業興味の分化は、中学生の3年間の学年差に比べて、高校生の3年間の学年差は小さくなっている(労働政策研究・研修機構,2007)。高校1年生と2年生という学年の違い、いいかえれば暦年齢による発達差はあるとしても、たまたま1年生においていろいろなことに自信をもっている生徒が多いと加齢による発達差以上の違いが生じてしまう可能性もある。そこで、この点を明らかにするため、職業意識の発達を捉えた別の指標との関連を検討してみることにした。

図表4-2 教育的進路課題

	1年生		2年生		学年計	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD
男子	11.20	(3.41)	10.59	(3.81)	10.93	(3.58)
女子	11.07	(3.84)	11.03	(4.20)	11.05	(4.00)
男女計	11.13	(3.64)	10.84	(4.03)	11.00	(3.81)

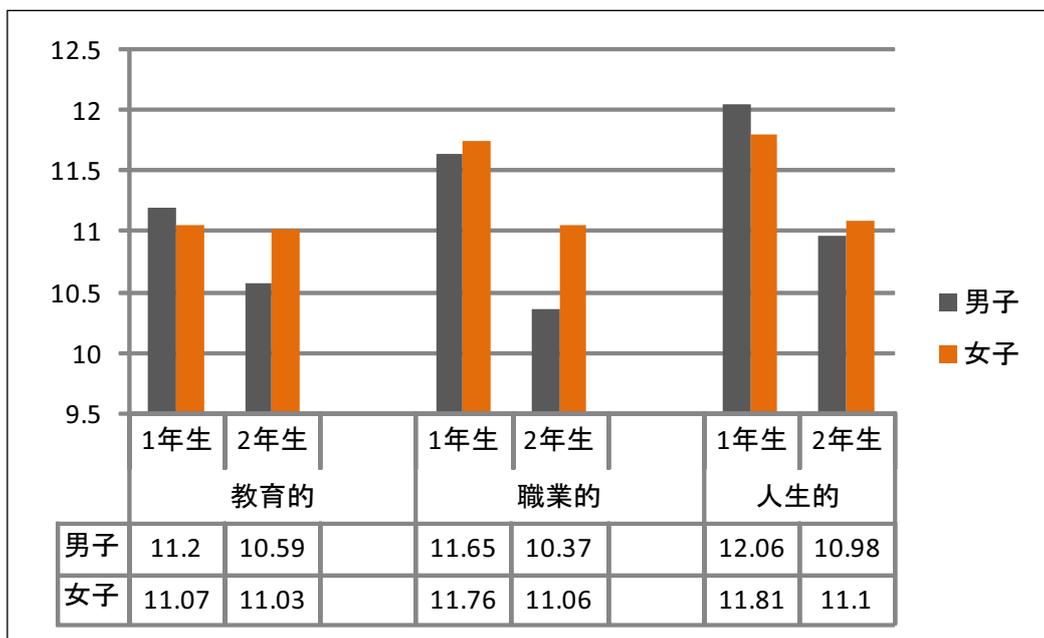
図表4-3 職業的進路課題

	1年生		2年生		学年計	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD
男子	11.65	(3.97)	10.37	(4.15)	11.07	(4.09)
女子	11.07	(3.84)	11.06	(3.95)	11.43	(3.78)
男女計	11.71	(3.77)	10.76	(4.04)	11.27	(3.92)

図表4-4 人生的進路課題

	1年生		2年生		学年計	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD
男子	12.06	(4.38)	10.98	(4.07)	11.58	(4.27)
女子	11.81	(3.25)	11.10	(4.28)	11.47	(3.77)
男女計	11.93	(3.81)	11.04	(4.17)	11.52	(3.99)

図表4-5 進路課題自信尺度の学年別、男女別平均値



(2) 将来の仕事や進路についてのアンケート項目との関連

①尺度全体の相関関係

「進路意識等に関するアンケート」では、問4と問5で、「将来の進路に関する希望が決まっているかどうか(進路の決定度)」、「将来の仕事についてよく考えているかどうか(仕事の考慮度)」をそれぞれ4段階評価で回答させている。この項目についての回答は、進路や仕事への意志決定のレベルについての自己評価でもある。これらの項目について肯定的な回答の順に4点～1点で得点化し、将来の進路および将来の仕事についての得点と進路課題自信尺度の各下位尺度の合計得点について全部の組み合わせで相関係数を算出した(図表4-6)。

まず、進路課題自信尺度の3つの課題間の内部相関はすべて.70以上となり、高いことがわかる。内部相関に関して値が最も高かったのは、教育的進路課題と職業的進路課題であった($r=.83$)。次が職業的進路課題と人生的進路課題であり($r=.78$)、最後が教育的進路課題と人生的進路課題であった($r=.72$)。次に、進路の決定度と仕事の考慮に関する項目への回答も、進路課題自信尺度の3つの自信の側面と有意な正の相関を示していることがわかった。すなわち、進路の希望を決定しているほど、また、将来の仕事をよく考えているほど、進路課題への自信も高いといえる。

図表4-6 進路に関する意識のアンケート項目と
進路課題自信尺度との相関係数(Pearson)

	進路の 決定	仕事の 考慮	進路課題自信尺度		
			教育的	職業的	人生的
進路の決定	1				
仕事の考慮	.62**	1			
教育的	.37**	.36**	1		
職業的	.42**	.47**	.83**	1	
人生的	.28**	.33**	.72**	.78**	1

注：**… $p<.01$ で有意

この結果は、データ全体を使った相関であるため、続いて、学年別、男女別の傾向を調べてみることにした。学年別、男女別にみた場合、問4の「進路」に関する平均値は、1年生男子2.16、2年生男子2.40、1年生女子2.45、2年生女子2.61で、1年生よりも2年生の値が高く、進路に関する希望は、男女とも2年生の方で高くなっていることがわかる。一方、問5の「仕事」についての項目では、1年生男子2.49、2年生男子2.33、1年生女子2.68、2年生女子2.76で、男女で傾向が異なり、男子では1年生の平均値が高かったが、女子では2年生の方が高かった。こういった傾向を踏まえた上で、将来の進路についての回答、将来の仕事への意志決定のレベル別に、各学年および男女別の進路課題自信尺度の平均値と標準偏差を算出した(図表4-7～図表4-10)。

②将来の進路、将来の仕事への回答別にみた進路課題自信尺度の平均値(学年別)

図表 4-7 および図表 4-8 に、学年別の進路と仕事の項目への各回答の選択者の人数、割合と、回答別に算出した進路課題自信尺度の平均値を示した。この結果をみると、将来の進路について「決まっている」と「ほぼ決まっている」という者の割合は、1年生より2年生で多く、将来の仕事についても「よく考えている」、「だいたい考えている」という者の割合は1年生より2年生で多い。この点では歴年齢を反映して意識が発達していることが伺われる。次に各決定度別に進路課題自信尺度の得点を見ると、1年生でも2年生でも進路についての決定度が高く、また、将来の仕事についてよく考えている者ほど、進路課題自信尺度の平均値が高くなっている。

図表4-7 将来の進路の決定度別にみた学年別
進路課題自信尺度の平均値(mean)と標準偏差(SD)

		《将来の進路について》	1年生(n=136)				2年生(n=112)			
			人数	%	mean	SD	人数	%	mean	SD
進路 課題 自信 尺度	教育的	決まっている	14	10.29	13.57	4.82	20	17.86	13.60	4.37
		だいたい決まっている	45	33.09	12.00	3.38	35	31.3	11.49	3.29
		あまり決まっていない	43	31.62	10.22	2.98	37	33.04	9.59	3.55
		全く決まっていない	32	23.53	9.94	3.45	17	15.18	8.18	3.30
	職業的	決まっている	15	11.03	14.13	4.96	20	17.86	13.95	4.90
		だいたい決まっている	44	32.35	12.73	3.37	36	32.14	11.67	3.02
		あまり決まっていない	41	30.15	11.12	3.12	38	33.93	9.13	3.17
		全く決まっていない	31	22.79	9.71	3.45	18	16.07	8.17	3.11
	人生的	決まっている	15	11.03	14.47	4.63	20	17.86	13.20	5.03
		だいたい決まっている	45	33.09	12.29	3.25	35	31.25	11.66	3.65
		あまり決まっていない	42	30.88	11.12	3.76	38	33.93	9.97	3.27
		全く決まっていない	31	22.79	11.03	3.71	17	15.18	8.88	4.31

図表4-8 将来の仕事の考慮度別にみた学年別
進路課題自信尺度の平均値(mean)と標準偏差(SD)

		《将来の仕事について》	1年(n=135)				2年(n=111)			
			人数	%	mean	SD	人数	%	mean	SD
進路課題自信尺度	教育的	よく考えている	27	20.00	12.96	4.42	20	18.02	13.00	5.01
		だいたい考えている	39	28.89	11.35	3.54	38	34.23	11.53	3.35
		あまり考えていない	52	38.52	10.52	2.25	34	30.63	9.35	3.49
		全く考えていない	15	11.11	8.53	3.89	16	14.41	9.00	3.29
	職業的	よく考えている	27	20.00	14.30	4.13	20	18.02	13.40	4.96
		だいたい考えている	38	28.15	11.89	3.24	40	36.04	11.85	3.13
		あまり考えていない	51	37.78	11.06	2.71	34	30.63	9.00	3.27
		全く考えていない	14	10.37	7.64	3.39	17	15.32	8.29	2.80
	人生的	よく考えている	28	20.74	13.89	3.77	20	18.02	12.80	5.32
		だいたい考えている	38	28.15	12.32	3.64	39	35.14	11.64	3.31
		あまり考えていない	51	37.78	11.10	3.30	33	29.73	9.85	3.73
		全く考えていない	15	11.11	9.07	3.35	17	15.32	9.59	3.94

③将来の進路、将来の仕事への回答別にみた進路課題自信尺度の平均値(男女別)

上記と同様の集計を男女別に行った結果が図表 4-9 と図表 4-10 である。この結果をみると、将来の進路について「決まっている」と「ほぼ決まっている」という者の割合は、男子より女子に多く、将来の仕事についても「よく考えている」、「だいたい考えている」という者の割合は男子より女子が多い。

次に各決定度別に進路課題自信尺度の得点をみると、女子では、図表 4-9 でも図表 4-10 でも、将来の進路や仕事について肯定的な回答をしている者ほど、どの進路課題に関しても値が高くなっていた。すなわち、将来の進路や仕事をよく考えている者ほど、進路課題自信尺度の平均値が高くなっていた。一方、男子では、図表 4-10 の仕事への考慮度に関しては、女子と同じく、肯定的な回答をしているほど、進路課題自信尺度の得点が高くなっていたが、将来の進路についての決定度に関しては、「だいたい決まっている」と回答した者において進路課題自信尺度の得点が最も高く、わずかな差で「決まっている」と回答した者がそれに続いた。「あまり決まっていない」と「全く決まっていない」という選択肢を選んだ者は明らかに得点が低かった。このように男子では将来の進路に関して「決まっている」と回答した者と「だいたい決まっている」と回答した者の違いが明確に見られなかったが、全体の傾向としては、女子と同じく、将来の進路や仕事について、前向きに考えているほど、進路課題自信尺度の平均値も高くなることが示されたといえよう。

図表4-9 将来の進路の決定度別にみた男女別
進路課題自信尺度の平均値(mean)と標準偏差(SD)

		《将来の進路について》	男子(n=112)				女子(n=136)			
			人数	%	mean	SD	人数	%	mean	SD
進路課題自信尺度	教育的	決まっている	11	10.00	11.09	4.18	23	17.29	14.78	4.20
		だいたい決まっている	31	28.18	11.94	3.31	49	36.84	11.67	3.38
		あまり決まっていない	44	40.00	10.35	3.41	36	27.07	9.42	3.01
		全く決まっていない	24	21.82	10.00	3.23	25	18.80	8.68	3.64
	職業的	決まっている	11	9.91	12.18	6.10	24	18.18	14.88	4.04
		だいたい決まっている	32	28.83	12.44	3.71	48	36.36	12.13	2.93
		あまり決まっていない	44	39.64	10.41	3.55	35	26.52	9.86	2.94
		全く決まっていない	24	21.62	9.33	3.31	25	18.94	8.86	3.51
	人生的	決まっている	11	9.91	12.18	5.76	24	18.18	14.46	4.29
		だいたい決まっている	32	28.83	12.66	4.00	48	36.36	11.58	2.95
		あまり決まっていない	45	40.54	10.80	3.91	35	26.52	10.29	3.09
		全く決まっていない	23	20.72	10.74	4.01	25	18.94	9.84	4.07

図表4-10 将来の仕事の考慮別にみた男女別
進路課題自信尺度の平均値(mean)と標準偏差(SD)

		《将来の仕事について》	男子(n=112)				女子(n=136)			
			人数	%	mean	SD	人数	%	mean	SD
進路課題自信尺度	教育的	決まっている	15	13.89	12.13	4.39	32	24.06	13.38	4.74
		だいたい決まっている	31	28.70	11.08	3.23	46	34.59	11.67	3.57
		あまり決まっていない	45	41.67	10.71	2.95	41	30.83	9.34	2.57
		全く決まっていない	17	15.74	8.94	3.19	14	10.53	8.57	4.03
	職業的	決まっている	15	13.76	13.33	5.45	32	24.24	14.19	4.00
		だいたい決まっている	33	30.28	11.88	3.40	45	34.09	11.87	3.02
		あまり決まっていない	45	41.28	10.44	3.10	40	30.30	10.00	3.11
		全く決まっていない	16	14.68	8.00	3.16	15	11.36	8.00	3.02
	人生的	決まっている	15	13.76	12.60	5.57	33	25.00	13.82	3.90
		だいたい決まっている	33	30.28	12.42	3.72	44	33.33	11.64	3.28
		あまり決まっていない	45	41.28	11.18	3.88	40	30.30	9.98	2.97
		全く決まっていない	16	14.68	9.24	3.01	15	11.36	9.47	4.32

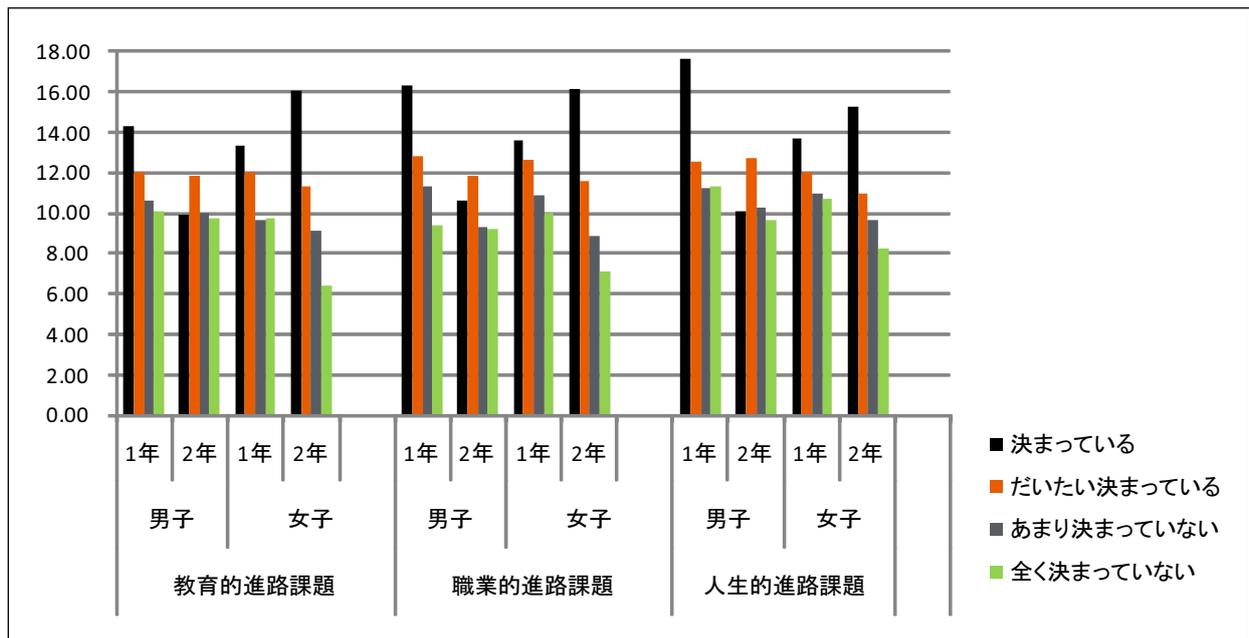
④全体の傾向のまとめ

以上、進路や仕事に対する意識は1年生より2年生、男子より女子で高いこと、さらに進路課題自信尺度との関連をみると、学年別でも男女別でも、進路や仕事をよく考えている者ほど、各進路課題についての自信も高いことがわかった。

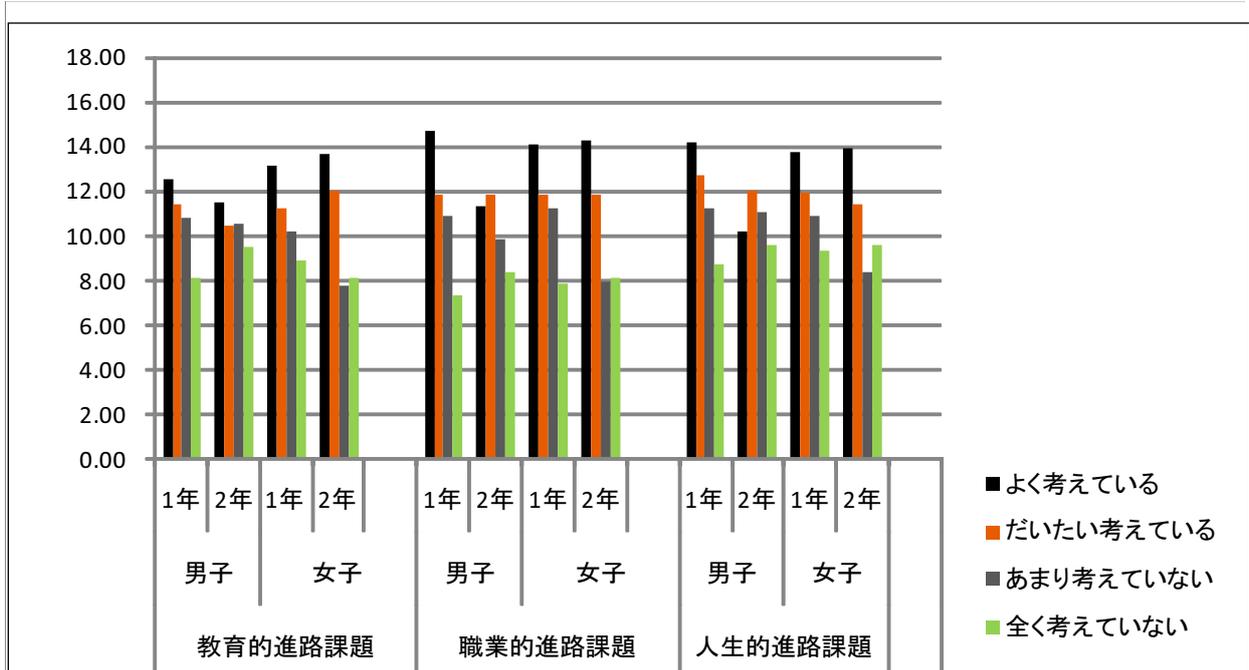
一方で、図表 4-7 や図表 4-8 で進路課題自信尺度の平均値の大きさをみてみると、例えば、将来の進路について「決まっている」と回答した者の自信尺度の平均値は2年生と1年生ではあまり変わらず、「だいたい決まっている」以下の平均値は、1年生に比べて2年生で全般に低くなっている。学年内でみた場合、進路や仕事に対する意識が高い方が自信尺度の平均値も高いが、1年生に比べて2年生では全体的に自信尺度の平均値が低い。また、図表 4-9 や図表 4-10 をみると、女子に比べて男子の進路課題自信尺度の平均値が低いことがわかる。1年生に比べて2年生の方が、進路や仕事についてはよく考えているという結果は、学年が上になるとともに進路に関する意識が発達していることを示している。それでは、図表 4-5 に見られたように、なぜ、進路課題自信尺度において2年生では1年生より自信が低くなるのだろうか。特に図表 4-5 をみると、1年生では男女差はそれほどでもないのに、2年生において男女の差が大きく、特に男子において進路課題自信尺度の得点が大きく低い点が気になるところである。そこで、男子、女子それぞれにおいて、学年別に将来の進路と仕事別に各選択肢への回答と進路課題自信尺度の平均値を算出した。将来の進路の決定度に関しては図表 4-11 に、将来の仕事についての考慮度に関しては図表 4-12 に示す。

まず、将来の進路の決定度別のグラフ(図表 4-11)を見ると、各学年、男女別の進路や仕事の意識と進路課題自信尺度との関連が明確に現れているが、特に1年生男子、2年生女子において、意識が高い者の自信尺度の得点が他と比べて格段に高くなっていることがわかる。一方で、特に2年生女子において顕著であるが、「決まっている」と回答した者と「全く決まっていない」と回答した者との得点の差が大きく、将来の進路に対する意識の違いが、自信尺度に大きく影響していることが示されている。それに対し、2年生の男子では、「決まっている」と回答した者の自信度がそれほどでもなく、「だいたい決まっている」と回答した者が自信尺度の得点が高い。しかし、「全く決まっていない」と回答した者でも、一定の自信尺度のレベルは保っており、2年生女子ほど大きく下がることはない。つまり、2年生の男子では、進路の意識に関わりなく進路課題自信尺度の得点がほぼ同程度であるのに対し、2年生の女子では、進路の意識の高い者と低い者でかなりの差が生じていることがわかる。

図表4-11 将来の進路の決定度別にみた男女別学年別進路課題自信尺度の平均値



図表4-12 将来の仕事の考慮度にみた男女別学年別進路課題自信尺度の平均値



将来の仕事の考慮度との関連をみても同様の傾向があるが、将来の進路に比べて、1年生男女、2年生女子で意識の高い者と低い者と、自信尺度の得点が大きく違うことがわかる。2年生男子では、「よく考えている」という者の自信度は他のグループに比べてそれほど高くはないが、「全く考えていない」という者の自信度は、他の群と比べて最も高く、全体に仕事の考慮度別による自信度のばらつきは最も小さくなっている。

全体の進路課題自信度の平均値を計算した図表 4-5 のグラフで 1 年生より 2 年生の自信が低くなっていたのは、2 年生男子において突出して平均値が高い層がいなかったこと、また、2 年生女子において自信度に大きなばらつきがあることが影響していた結果であると考えられる。

以上、進路や仕事についての意識と進路課題自信尺度との関連をみたが、進路課題についてうまくできるという自信は、学校生活のいろいろな課題場面についての自信とも関連が見られるように思われる。そこで次に、特に学校生活での学業面として、学習している教科についての自信度との関連を検討してみたい。

(3) 学校での教科の得意、不得意

アンケートでは、学校で勉強する 10 教科について、「得意」、「普通」、「不得意」の 3 段階で評価してもらった。全体の傾向として、学年、男女別に回答の度数を集計した結果を図表 4-13 に示す。「得意」という回答が「普通」、「不得意」に比べて 20%を超える教科を高い順に見てみる。1 年男子では、数学、保健・体育、美術、理科、社会、技術・家庭となる。1 年女子では、音楽、技術・家庭、保健・体育、美術である。2 年男子では、保健・体育、数学、音楽、美術、国語、社会、技術・家庭となる。2 年女子では、音楽、美術、情報、国語、数学である。

次に、「得意」を 3 点、「普通」を 2 点、「不得意」を 1 点として、各教科別に、学年、男女別に平均値(mean)と標準偏差(SD)を算出した。結果を図表 4-14 に示す。なお、表の一番下「10 教科総合」は、10 教科を合計し教科数の 10 で除した平均値、「5 教科総合」は「国語、社会、数学、理科、英語」を合計し教科数の 5 で除した平均値である。

10 教科総合の平均値を見ると、2 年男子が一番高い。2 年生男子において教科についての自信度が高いことが反映されているようである。これは頻度の集計で、「得意」という教科が 2 年生男子に多かったことと一貫した傾向である。2 番目に高かったのは 1 年生男子、続いて 1 年生女子、2 年生女子の順となっている。5 科目総合では、2 年生男子が一番高く、続いて 1 年生男子、2 年生女子、1 年生女子となった。学年計、男女計の値を算出したところ、1 年生の合計が 1.67、2 年生の合計が 1.74 となり平均値の差の検定で有意な傾向が見られた($t=1.71, p<.10$)。また、男子の合計は 1.82、女子の合計は 1.61 で平均値の差の検定で有意差が検出された($t=4.42, p<.01$)。1 年生より 2 年生、女子より男子で、教科への自信度は高めに回答されていることがわかる。なお、この評価は本人の得意・不得意という自己評価によるものであって、現実の学校での成績を必ずしも反映しているとは限らない。

図表4-13 学習教科に対する得意、不得意の集計

科目	1年						2年					
	男子			女子			男子			女子		
	得意	普通	不得意									
国語	3 (4.76)	24 (38.10)	36 (57.14)	5 (6.49)	41 (53.25)	31 (40.26)	12 (22.64)	33 (62.26)	8 (15.09)	16 (23.88)	31 (46.27)	20 (29.85)
社会	13 (20.63)	31 (49.21)	19 (30.16)	2 (2.67)	41 (54.67)	32 (42.67)	11 (20.75)	29 (54.72)	13 (24.53)	6 (8.96)	26 (38.81)	35 (52.24)
数学	23 (36.51)	18 (28.57)	22 (34.92)	10 (12.99)	19 (24.68)	48 (62.34)	13 (24.53)	24 (45.28)	16 (30.19)	16 (23.53)	20 (29.41)	32 (47.06)
理科	15 (23.81)	32 (50.79)	16 (25.40)	3 (3.90)	34 (44.16)	40 (51.95)	10 (18.87)	25 (47.17)	18 (33.96)	5 (7.46)	18 (26.87)	44 (65.67)
英語	6 (9.52)	21 (33.33)	36 (57.14)	9 (11.69)	23 (29.87)	45 (58.44)	5 (9.43)	16 (30.19)	32 (60.38)	10 (14.71)	26 (38.24)	32 (47.06)
音楽	7 (13.73)	25 (49.02)	19 (37.25)	23 (32.86)	38 (54.29)	9 (12.86)	10 (24.39)	22 (53.66)	9 (21.95)	15 (26.32)	26 (45.61)	16 (28.07)
美術	13 (24.53)	23 (43.40)	17 (32.08)	15 (21.43)	37 (52.86)	18 (25.71)	10 (23.26)	18 (41.86)	15 (34.88)	16 (26.23)	17 (27.87)	28 (45.90)
保健・体育	19 (30.65)	29 (46.77)	14 (22.58)	18 (23.68)	39 (51.32)	19 (25.00)	14 (26.42)	24 (45.28)	15 (28.30)	9 (13.24)	32 (47.06)	27 (39.71)
技術・家庭	11 (21.57)	29 (56.86)	11 (21.57)	17 (24.29)	41 (58.57)	12 (17.14)	11 (20.75)	31 (58.49)	11 (20.75)	7 (10.29)	40 (58.82)	21 (30.88)
情報	9 (14.75)	41 (67.21)	11 (18.03)	13 (16.88)	46 (59.74)	18 (23.38)	8 (16.33)	28 (57.14)	13 (26.53)	15 (24.19)	23 (37.10)	24 (38.71)

※数字は人数、()内は一つの教科における各回答の割合

図表4-14 学年、男女別にみた学習教科の得手、不得手の平均値

科目	1年		2年	
	男子	女子	男子	女子
	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)	mean (SD)
国語	1.48 (0.59)	1.66 (0.60)	2.08 (0.62)	1.94 (0.74)
社会	1.90 (0.71)	1.60 (0.54)	1.96 (0.68)	1.57 (0.65)
数学	2.02 (0.85)	1.51 (0.72)	1.94 (0.74)	1.76 (0.81)
理科	1.98 (0.71)	1.52 (0.58)	1.85 (0.72)	1.42 (0.63)
英語	1.52 (0.67)	1.53 (0.70)	1.49 (0.67)	1.68 (0.72)
音楽	1.76 (0.68)	2.20 (0.65)	2.02 (0.69)	1.98 (0.74)
美術	1.92 (0.76)	1.95 (0.69)	1.88 (0.76)	1.80 (0.83)
保健・体育	2.08 (0.73)	1.99 (0.70)	1.98 (0.75)	1.74 (0.68)
技術・家庭	2.01 (0.66)	2.07 (0.64)	2.00 (0.65)	1.79 (0.61)
情報	1.98 (0.58)	1.94 (0.64)	1.90 (0.65)	1.85 (0.79)
10教科総合	1.85 (0.32)	1.79 (0.35)	1.91 (0.30)	1.74 (0.36)
5教科総合	1.78 (0.42)	1.57 (0.37)	1.86 (0.38)	1.66 (0.34)

続いて、教科に対する自信度が進路課題自信尺度とどう関連するのかをみるため、教科への自信と進路課題自信尺度との相関を学年、男女別にみた(図表 4-15)。教科への自信は 10 科目の総合点と国語、社会、数学、理科、英語の 5 教科の総合点の 2 つの指標を用いた。

この結果、科目への自信度と進路課題自信尺度に関して、一番明確な正の相関が見られたのは 2 年生女子であった。2 年生女子では、教科について得意と考えているほど、教育的、職業的、人生的進路課題全般にも自信を持っていることが示された。同様の傾向としては、1 年生の男子に見られた。1 年生男子では、10 教科総合では、教育的進路課題との間に 5 % の有意な正の相関が見られ、職業的課題と人生的課題に関してはそれぞれ 10% 以下で正の関連傾向が見られた。また、5 教科総合でみると、すべての相関が有意となった。1 年生女子では、教科へ

の自信度と進路課題自信尺度との相関はそれほど明確に見られなかった。10教科総合では、職業的課題と人生的課題で正の関連が見られるが、5教科総合では職業的課題と人生的課題との相関は見られず、教育的課題との間に正の関連が見られた。2年生男子では、10教科でも5教科でも2つの尺度間に相関はなく、他の群と異なり、相関係数は負を示した。2年生男子は、教科全般に関する自信の高さと将来の進路や職業や人生に関する自信とが関連せず、進路課題自信尺度での自信と教科への自信が反対の関係をもつ傾向が現れているということがわかった。

進路課題についての自己効力を測定する進路課題自信尺度は、学校生活を円滑に送る上で生徒がもっている学習活動全般への自信度とも関連する可能性があると考えたが、明確に見られたのが2年生女子と1年生男子で、2年生男子と1年生女子では特にはっきりした関係が見られなかった。女子の場合は、2年生でみるかぎり教科への取り組みと進路課題への取り組みが明確に結びついているようである。教科への自信が高い場合には、進路課題への自信も高くなる。しかし、男子の場合、1年生は教科への自信と進路課題への自信が結びついているが、2年生では、教科への自信が進路課題への自信と結びついていない。このような傾向は前節において見られた、2年生男子の進路課題自信尺度のばらつき少なさの影響を受けているようにも思われる。つまり、2年生男子では、進路課題自信尺度について、他の群に比べてばらつきが少なく、極端に高い生徒もいないかわりに極端に低い生徒もいない。教科への自信が全般に高いこともあり、全体に自信を持っている生徒が多いことが考えられる。そこで相関としては他のグループほど明確な結果が得られなかった可能性も考えられよう。なお、今回の対象者は各学年男女別で分けるとそれぞれサンプル数が少なくなるため、本研究から示された傾向を高校生全般の傾向として一般化して考えるには、今後さらに多くのデータを集めて検証する必要がある。

進路課題自信尺度の得点と教科への自信度との関連は解釈が難しいものとなったが、続いて、個人の特性を測定することができる VRT への回答結果と進路課題自信尺度との関連を調べてみたい。

図表4-15 教科への自信と進路課題自信尺度との相関

	10科総合				5科(国、社、数、理、英)総合			
	1年生		2年生		1年生		2年生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
教育的	.30*	.17	-.05	.37**	.36**	.20†	-.09	.32*
職業的	.25†	.23†	-.07	.32*	.25*	.19	-.07	.28*
人生的	.27†	.24†	-.10	.38**	.31*	.06	-.03	.35**

注：***…p<.01；**…p<.05；†…p<.10

(4) 職業レディネス・テスト (VRT) の回答との関連

VRT では、職業に対する興味や自信など、いろいろな観点から職業に対する準備の程度を測定する。VRT における職業への興味は仕事に対する積極的な関心を示し、また、職務遂行への自信は、能力的な側面での自信を反映すると考えることができる。そこで、VRT の尺度への関心や自信の高さが、進路課題自信尺度における得点の高さとどのように関連するのかを調べた。

①尺度合計得点と進路課題自信尺度との相関

まず、VRT の3つの尺度である A 検査(職業興味)、B 検査 (基礎的志向性)、C 検査 (職務遂行の自信度) について、それぞれの尺度で合計の得点を算出した。そして、学年、男女をこみにした全体のデータを使って、進路課題自信尺度の3つの下位尺度との相関係数 (Pearson の r) を算出した (図表 4-16)。

当然のことながら VRT の3つの尺度間の内部相関が高く、興味、自信、基礎的志向性の相互に正の有意な相関が見られた。また、進路課題自信尺度との関連をみると、職業興味との相関は教育的進路課題で有意なもの ($p<.01$)、職業的進路課題、人生的進路課題では、関連の傾向が見られる程度であった ($p<.10$)。ただ、職務遂行の自信度と基礎的志向性に関しては、すべての相関が1%水準で有意となった。職務遂行の自信度については、自信度を回答するという点で、進路課題への自信を聞く尺度との関連が強く表れたものであろう。興味深いのは、職務遂行の自信度よりも日常生活の基礎的志向性への回答の方にやや高い数値が見られた点である。日常生活における基礎的志向性は、項目の内容から見て、普段の学校生活への積極的な取り組みを反映している尺度であるとも考えられる。学校生活のいろいろな場面で、活動的な取り組みをしている生徒ほど、進路課題自信尺度に対する値も高いことが示されているようだ。

図表4-16 VRT3 尺度の合計点と進路課題自信尺度との相関

		職業興味合計	職務遂行自信度合計	基礎的志向性合計
VRT	職業興味合計	1.00		
	職務遂行の自信度合計	.75**	1.00	
	基礎的志向性合計	.57**	.61**	1.00
進路課題自信尺度	教育的	.18**	.24**	.25**
	職業的	0.12†	.21**	.23**
	人生的	0.12†	.20**	.23**

注：**… $p<.01$ ；*… $p<.05$ ；†… $p<.10$

次に、各学年男女別に同様の相関係数を算出した（図表 4-17）。これまでの分析において、男女による差がみられ、また学年によっても男女で傾向に違いが見られたことから、ある特定のグループの傾向が全体にも反映されている可能性があると考えたためである。

この結果をみると、VRT の尺度の内部相関は、どのグループでも同様に 1 %水準で有意な正の相関を示していることがわかる。しかしながら、VRT の尺度の合計点と進路課題自信尺度との関連は、女子においてのみ有意な相関、または正の関連傾向を示し、男子に関しては意味のある相関が見られなかった。すなわち、図表 4-16 の全体データにおける VRT と進路課題自信尺度との関連は、女子における相関関係を反映したものであり、男子では、VRT への回答と進路課題自信尺度との関連が見られなかった。

図表4-17 学年男女別にみた VRT と進路課題自信尺度との相関

尺度	変数	1年生男子			1年生女子		
		職業興味合計	職務遂行自信度合計	基礎的志向性合計	職業興味合計	職務遂行自信度合計	基礎的志向性合計
VRT	職業興味合計	1			1		
	職務遂行の自信度合計	.63**	1		.83**	1	
	基礎的志向性合計	.47**	.56**	1	.64**	.73**	1
進路課題自信尺度	教育的	-.07	.05	.10	.26*	.39**	.25*
	職業的	-.10	.07	.09	.19	.37**	0.23
	人生的	-.06	.08	.18	.05	.21†	.12†

尺度	変数	2年生男子			2年生女子		
		職業興味合計	職務遂行自信度合計	基礎的志向性合計	職業興味合計	職務遂行自信度合計	基礎的志向性合計
VRT	職業興味合計	1			1		
	職務遂行の自信度合計	.75**	1		.77**	1	
	基礎的志向性合計	.54**	.56**	1	.66**	.61**	1
進路課題自信尺度	教育的	.04	-.01	.18	.43**	.41**	.48**
	職業的	-.04	-.12	.13	.44**	.46**	.52**
	人生的	.06	-.05	.15	.42**	.48**	.51**

注：**…p<.01；*…p<.05；†…p<.10

②進路課題自信尺度と VRT 各領域別得点の相関

進路課題自信尺度と VRT の得点の合計点に関して、女子においてのみ有意な相関が見られ男子では関連はみられなかったが、進路課題自信尺度の高い生徒はどんな領域への興味を持っているのか、あるいはどんな領域について自信が高いのかを調べるため、VRT の各尺度各領域別得点と進路課題自信尺度との相関を全体、各学年男女別に算出した（図表 4-18）。

図表4-18 VRT の得点と進路課題自信尺度の得点との相関係数(学年別・男女別)

		A検査						B検査			C検査					
		R	I	A	S	E	C	D	P	T	R	I	A	S	E	C
全体	教育的進路課題	0.00	0.09	0.16 *	0.16 *	0.18 **	0.01	0.26 **	0.21 **	0.04	0.07	0.14 *	0.16 *	0.21**	0.23 **	0.05
	職業的進路課題	-0.02	0.07	0.12†	0.10	0.12†	-0.05	0.23 **	0.20 **	0.04	0.08	0.12 †	0.14 *	0.16*	0.22 **	0.02
	人生的進路課題	0.02	0.10	0.10	0.07	0.12†	-0.03	0.24 **	0.19 **	0.05	0.10	0.16 *	0.13 *	0.13†	0.23 **	0.07
1年男子	教育的進路課題	-0.27*	-0.10	0.16	-0.12	0.16	-0.10	0.28*	0.05	-0.15	-0.10	0.00	0.21	-0.10	0.27*	-0.09
	職業的進路課題	-0.26*	-0.09	0.09	-0.13	0.12	-0.13	0.29*	0.00	-0.13	-0.06	0.06	0.17	-0.10	0.30*	-0.14
	人生的進路課題	-0.28*	-0.03	0.21	-0.14	0.12	-0.12	0.30*	0.11	-0.07	-0.12	0.10	0.31*	-0.11	0.27*	-0.07
1年女子	教育的進路課題	0.10	0.25*	0.12	0.18	0.26*	-0.01	0.29*	0.17	0.06	0.20	0.28*	0.19	0.35**	0.32**	0.18
	職業的進路課題	0.03	0.16	0.12	0.13	0.22†	-0.04	0.24*	0.21†	-0.01	0.20	0.23†	0.24†	0.31*	0.32**	0.15
	人生的進路課題	-0.07	0.08	0.01	0.03	0.12	-0.06	0.14	0.14	-0.05	0.08	0.12	0.08	0.21†	0.22†	0.10
2年男子	教育的進路課題	0.07	0.06	0.02	0.01	-0.01	-0.02	0.19	0.18	0.05	0.09	0.07	-0.01	-0.13	0.05	-0.02
	職業的進路課題	0.16	0.06	-0.09	-0.06	-0.17	-0.12	-0.01	0.23	0.05	0.15	-0.07	-0.15	-0.20	-0.10	-0.04
	人生的進路課題	0.25†	0.15	-0.12	0.08	-0.16	-0.08	0.07	0.18	0.08	0.15	0.02	-0.19	-0.07	-0.06	-0.04
2年女子	教育的進路課題	0.12	0.18	0.30 *	0.44**	0.29 *	0.12	0.32 *	0.44**	0.17	0.13	0.23†	0.23†	0.51**	0.26 *	0.09
	職業的進路課題	0.12	0.24†	0.33**	0.40**	0.31 *	0.13	0.45**	0.37**	0.20	0.18	0.31 *	0.27 *	0.52**	0.32 *	0.13
	人生的進路課題	0.20	0.21†	0.30*	0.34 **	0.37 **	0.21†	0.49 **	0.32*	0.20	0.29*	0.34 **	0.31*	0.45 **	0.42 **	0.29*

※ **…P<.01; *…P<.05; †…P<.10。

a. 全体の関連

まず、データ全体の相関を検討する。職業興味からみると、A検査では、芸術的領域（A領域）、社会的領域（S領域）、企業的領域（E領域）と教育的進路課題との間に有意な正の相関が見られた。A領域とE領域については、職業的進路課題や人生的進路課題に関しても有意な関連の傾向が見られる。

次に、職業興味と同じ項目で職務遂行の自信度を尋ねるC検査との関連をみた。C検査は自信の程度を聞くので、進路課題自信尺度との正の関連が高く出ているようである。A検査以上に芸術的領域（A領域）、社会的領域（S領域）、企業的領域（E領域）と進路課題自信尺度との正の関連が高く出ている。特にE領域との関連が高い。なお、A検査では有意ではなかった研究的領域（I領域）との正の相関、あるいは関連の傾向が検出された。逆に、A検査でもC検査でもあまりはっきりした相関が見られなかった領域は、現実的領域（R領域）と慣習的領域（C領域）である。R領域は人よりも機械や物に向かうような作業への興味、C領域は地道にこつこつと行っていくような作業での興味を示す。性格的に控えめだったり、慎重だったりするようなタイプである可能性もあるため、進路課題自信尺度で聞くような自分自身の有能感を表明することには消極的である可能性もあろう。

職業興味や職務遂行の自信度にみられるこの傾向は日常生活の基礎的志向性にも見られた。進路課題自信尺度との間に有意な正の相関が見られたのは、対情報志向（D志向）と対人志向（P志向）であった。対物志向（T志向）では、明確な相関は見られなかった。D志向はI領域、P志向はS領域やE領域と関連があり、T志向は現実的領域（R領域）と関連がある。職

業興味や職務遂行の自信度と同様の傾向が表れていると言えよう。

次に、各学年男女別に見たときの VRT 各尺度と進路課題自信尺度との関連を検討する。

b. 1年生男子

全体としてみられた傾向と一致していた点は、進路課題自信尺度と B 検査の対情報志向 (D 志向) および C 検査の企業的領域 (E 領域) に関して有意な正の相関が見られた点であった。さらに、1年生男子に特徴的であった点は、A 検査の現実的領域 (R 領域) との有意な負の相関である。負の相関が見られるということは、人と接するよりも機械や物を扱ったり、道具を使ってこつこつと作業するようなことを好む場合には、進路課題自信尺度は低くなることを意味する。また、有意ではなかったが、慣習的領域 (C 領域) に関しても、A 検査、C 検査ともに相関係数の値は負になっている。1年生男子の場合、人と接するよりも機械いじりを好んだり、几帳面で地道な作業を好む特性を持つ者ほど、進路課題に対して自信を表明しない傾向が現れているようだ。

c. 1年生女子

1年生女子では、A 検査で研究的領域 (I 領域) と企業的領域 (E 領域) においていくつか有意な正の相関が見られた。C 検査では研究的領域 (I 領域)、社会的領域 (S 領域)、企業的領域 (E 領域) との関連が A 検査でみられた関連よりも高かった。また、芸術的領域 (A 領域) との関連も見られた。全体データと同じく、職業興味よりは職務遂行の自信度に関して、有意な正の相関が多く見られている。B 検査に関しても、全体データと同じく対情報志向 (D 志向) との正の関連がみられたが、対人志向 (P 志向) に関しては、全体データほどみられず、職業的進路課題との間に有意な正の関連傾向がみられただけであった。1年生に関しては、男女ともに B 検査の D 志向は全体の特徴と一致しているが、P 志向は特に意味のある関連が見られていない。

d. 2年生男子

2年生男子に関しては、VRT の各領域と進路課題自信尺度との間に意味のある相関はほとんど見られなかった。唯一、A 検査の現実的領域 (R 領域) と人生的進路課題に正の関連傾向が 10%水準で見られたのみである。2年生男子に関しては、図表 4-17 の VRT の各検査の合計得点と進路課題自信尺度との相関係数においても有意な相関がなかったが、各興味領域別に関してもこれと一致する結果となった。

e. 2年生女子

2年生女子は、1年生男女、2年生男子と比べて、VRT との相関が多くみられ、また相関係数の値も大きかった。A 検査では、芸術的領域 (A 領域)、社会的領域 (S 領域)、企業的領域 (E 領域) に関して有意な正の相関が見られ、また、研究的領域 (I 領域)、慣習的領域 (C 領域) においても有意な正の関連傾向が見られた。C 検査の各領域との間では、S 領域との相関が最も高く、そのほか、E 領域、A 領域、I 領域との間にも有意な相関が見られた。また、現実的領域 (R 領域)、慣習的領域 (C 領域) に関しては、人生的進路課題に関して有意な正の相

関が見られた。

f. VRT と進路課題自信尺度との関連についてのまとめ

全体と各学年男女別に相関関係をみたが、2年生の男女間で VRT との関連の傾向が全く違っていた点が興味深かった。2年生の男子では、VRT の結果と進路課題自信尺度との間に相関関係がほとんど見られないという結果であるのに対して、女子では、かなりの領域に関して有意な正の相関がみられ、また、相関係数の値もすべてプラスである。前節においても2年生男子において、進路課題自信尺度と他の変数との間に明確な相関が見られないという結果が得られていたが、これは VRT との関連でも一貫していた。

他方、2年生女子では、進路課題に自信を持っている生徒は、職業興味においては、研究的領域 (I)、芸術的領域 (A)、社会的領域 (S)、企業的領域 (E) に関心が高いタイプ、日常生活の志向性に関しては、対情報志向 (D 志向)、対人志向 (P 志向)、職務遂行の自信度に関しては、慣習的領域 (C) 以外の多くの領域で自信が高いことが示されている。これらの領域に関する得点の高さと進路課題自信尺度との正の相関は1年生女子においても見られることから、女子における特徴といえるかもしれない。もともと、女子は全般に A、S、E 領域の平均値の高い生徒が多く、基礎的志向性に関しては、T 志向に比べて D 志向や P 志向が高いという傾向をもつ。そこで、領域との関連というよりは、どんな項目にも積極的に肯定的に答えるタイプとの関連が顕著にでている可能性も考えられる。ただ、VRT の各領域の平均値では、女子の場合、A 検査、C 検査とも R や I 領域が低いが、進路課題自信尺度との関連では、I 領域との関連も見られた。I 領域は知的な活動に対する興味関心を示すので、進路課題自信尺度の得点が高い女子の場合、学業を含め、知的な活動への意欲が高い生徒であることも考えられる。学校で学習している科目との関連を検討した際、特に2年生女子で科目への自信度の高さと進路課題自信尺度との有意な正の相関が見られたことはこれと一貫する傾向である。

また、1年生男子であるが、2年生男子と同じように、女子と比べてみると明確な相関関係は少なかったものの、A 検査の R 領域との負の相関、基礎的志向性の D 志向や C 検査の E 領域との正の相関など、いくつかの特徴は見られた。

それぞれのグループの結果を見ると、1年生でも2年生でも男子より女子において VRT の尺度との相関関係が強くみられたため、全体の傾向は主に女子の特徴を反映していると考えられるかもしれない。ただ、基礎的志向性に関しては、特に D 志向に関して教育的進路課題と人生的進路課題で、女子だけでなく男子でも正の相関が見いだされている。また、C 検査については企業的領域 (E 領域) との関連も2年生男子以外には共通に見られる。

基礎的志向性の対情報志向は日常生活における知的好奇心の高さや、情報を収集してそれを有効に活用するという特性であり、他方、企業的領域は、自分で考えて物事を企画したり、積極的に取り組む姿勢を反映する尺度でもあるため、こういった活動への興味関心や自信が、進路課題への取り組みも促し、結果として進路課題をうまく処理できるという自信の高さにもつながっていくという流れも考えられよう。

4. まとめ

本章では、進路課題自信尺度によって測定される自己効力のレベルと、将来の進路や仕事への取り組みに関する意識、学校での学習活動に関する自信、VRT 尺度との関連について検討した。

個々の結果については、それぞれの節で述べた通りであるが、全体を通して結果をまとめてみると次のような知見が得られている。

- ① 進路課題自信尺度では、2年生より1年生で平均値が高かった。1年生では男子の平均値が女子よりやや高めであるが、2年生では、男子より女子の平均値がやや高めである。ただし、どちらの学年についても性についての統計的な有意差はない。
- ② 進路意識に関するアンケートでは、進路や仕事に対する意識は1年生より2年生、男子より女子で高いこと、さらに進路課題自信尺度との関連をみると、学年別でも男女別でも、進路や仕事をよく考えている者ほど、各進路課題についての自信も高い。なお、1年生男女、2年生女子では、進路や職業についての意識が高い者と低い者で、進路課題自信尺度の得点が大きく違うが、2年生男子ではそれほど違いがない。
- ③ 学校で学習する教科については、1年生より2年生、女子より男子で、自信度は高く回答されている。進路課題自信尺度との関連を見ると、1年生男子、2年生女子で進路課題自信尺度と科目への自信度に統計的に有意な正の相関が見られたが、1年生女子では正の関連傾向にとどまった。2年生男子では、特に関連はみられず、相関係数は負を示した。
- ④ 職業レディネス・テスト（VRT）との関連では、職業興味（A 検査）に比べ、基礎的志向性（B 検査）および職務遂行の自信度（C 検査）に関して、進路課題自信尺度との正の相関がみられた。2年生男子に関しては VRT と進路課題自信尺度との間に意味のある関連は見られなかったが、1年生男女、2年生女子では、職務遂行の自信度に関して、E 領域(企業的領域)への自信の高さが進路課題自信尺度との自信度と正の相関を示した。また、基礎的志向性では、D 志向(対情報志向)の高さが進路課題自信尺度と正の相関を示した。

上記にまとめたように、進路課題自信尺度で測定した自己効力の高さと他の変数との関連からみて、学年に関して一貫した傾向を読み取ることは難しかった。例えば、進路に対する意識の成熟ということ考えると1年生よりも2年生の方が進んでいることが予想されるが、進路課題自信尺度からみると1年生に比べて、2年生の自信度は低くなっている。その一方で、将来の進路や職業についての意識は1年生より2年生が高いという結果が得られており、一貫しない結果となっている。1年生に比べて2年生で進路課題自信尺度が低くなっているのは、学年が上になるといろいろな意味で進路や将来について考える機会が増えたために逆に自信をもてなくなるという心理的な変化の影響を受けた可能性もある。ただ、学年という変数に加えて、性差という変数を考えてみると、もう少し解釈の可能性が広がるように思われた。

進路課題自信尺度の得点そのものに関しては、各学年で性差に関する統計的な有意差は見られなかった。しかし、将来の進路や職業についての意識への回答毎に進路課題自信尺度の得点を求めると、1年生では、男子、女子で2つの変数の関連の傾向に大きな違いがなかったが、2年生では、2つの変数の関連に男女で差が見られた。2年生男子では、進路をよく考えている生徒とあまり考えていない生徒との間で進路課題自信尺度の得点の差は小さかった。他方、2年生女子では、進路をよく考えている生徒の自信度の高さと進路をあまり考えていない生徒の自信度の低さが極端になった。

男子と女子の傾向の違いは、教科への自信との関連や職業レディネス・テストとの関連でも見られた。2年生男子で、教科への自信度が進路課題への自信度とまったく関係がなかったこと、職業レディネス・テストとの関連においても相関が見られなかったことは、男子の場合、進路や仕事を選ぶことへの自信は、学習への自信や現在の職業興味等のあり方に関係がなく、独立であることを示している。それに対し、女子の場合は、学校の教科への取り組みに自信をもっている生徒、日常生活において知的活動を志向し、積極的に行動するようなタイプの生徒が将来の職業や進路選択に自信を持っている傾向が示されている。

このように、進路に対する自己効力は、男女で発達の様相が異なること、また、関連する要因も異なることが本研究の結果から示唆された。このことは、学年や年齢だけで進路意識の発達を捉えるのではなく、男女差という性の要因も含めて考えることの重要性を示しているように思われる。1年生の男女に比べて2年生の男女に関していろいろな点で傾向が大きく異なった点は、加齢とともに、性差という要因が生徒の意識や行動に影響を及ぼした結果であるとも考えられる。男子と女子で進路意識の発達の様相が異なるのであれば、学校や労働行政が彼らのキャリア形成を支援する場合、それぞれの意識の発達の違いに基づく課題や問題点を考慮して、目標を立てたり効果的な方法を考える必要があるかもしれない。

例えば、本研究の結果から関連づけるならば、男子においては1年生に比べて2年生で、自己効力や進路や仕事への選択に関する意識に関してレベルが下がったり、教科への自信度と自己効力との関連が見られなくなったりする結果が得られているが、これについては、男子における進路に関する意欲や関心の低下という可能性も考慮し、情報提供、進路指導、進路相談等の支援の方法を検討する必要があるだろう。また、女子においては、1年生に比べて2年生で、自己効力も高く進路に対して関心の高い生徒とそうでない生徒が分化するという傾向がみられたが、学年が上がるとともに自己効力や進路への意識が低くなってしまいう生徒については、進路意識を高めるための効果的な支援について検討することも必要である。

もちろん、本研究で扱ったデータは一つの高校で集められた限られたサンプルであるため、高校生一般の発達の様相を捉えているというには限界があることも事実である。ただ、今回の分析を通して、いろいろと興味深い結果が得られているので、今後は、この結果から得られた知見を一つの仮説あるいは手がかりとして、多くの高校、様々なサンプルから広くデータを集めるなど、本研究の結果について、さらに明確に検証していくことを課題としたい。

【引用文献】

- Bandura,A 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. Psychological Review, 84, 191-215.
- Betz,N.E. & Hackett,G. 1981 The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. Journal of Counseling Psychology, 28, 5, 399-410.
- Betz, N.E. & Hackett,G. 1986 Applications of self-efficacy theory to understanding career choice behavior. Journal of Social and Clinical Psychology, 4, 279-289.
- Hackett,G.& Betz,N.E. 1981 A self-efficacy approach to the career development of women. Journal of Vocational Behavior, 18, 326-339.
- 松井 仁・村田純子 1997 青年用有能感調査票の検討 教育心理学研究, 45, 2, 220-227.
- 労働政策研究・研修機構 2006 「職業レディネス・テスト（第3版）手引」 雇用問題研究会
- 労働政策研究・研修機構 2007 「中学生、高校生の職業レディネスの発達－職業レディネス・テスト標準化調査分析を通して－」 労働政策研究報告書, No.87
- 坂柳恒夫・清水和秋 1990 中学生の進路課題自信度と性役割自己概念との関連 進路指導研究, No.11,p.18-27.
- 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教育心理学研究, No.41, 358-364.